様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３１３９

研究課題名（和文）近代移行期の都市空間における兵士と地域社会の関係―プロイセン軍駐屯都市ハレを例に

研究課題名（英文）Relations between soldiers and local society in cities of the 18th and 19th century Germany : City Halle an der Saale as an example of garrison cities, where a prussian army was stationed

研究代表者
丸畠　宏太（Maruhata, Hiroto）

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号：２０２０２３３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目標は、プロイセン軍駐屯都市ハレを例に軍隊と地域社会の関係、そして兵士のあり方やメンタリティが18世紀から19世紀にかけての近代移行期にどう変化したかを考察することだった。ハレ駐屯軍の兵籍名簿などの分析から、18世紀後半の兵士は出身地や職業から地元とのつながりが強く、19世紀にはじまる兵役義務に根ざした国民軍隊の先駆的な面があることを明らかにした。また、兵役体験者の手記などから、19世紀前半の兵士はまだ国民的価値に染まっていないことが見えてきた。他方、印刷物を通じて一般兵士に軍務の価値を広めようとの試みにも注目し、雑誌『兵士の友』の記事を収集・分析し、発刊の背景も明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の独創性は、ひとつは、近世の専門家と近代の専門家が協力して、軍隊駐屯都市という生活空間を舞台に、身分制社会から国家公民社会へと時代が移行する中で（＝近代移行期）、軍隊と市民社会の関係がどう変化したかを、兵士と住民のレヴェルから考察した点にある。もうひとつは、兵士のメンタリティに着目した点である。兵役義務が一般化した国民国家で軍隊体験は男子国民の通過儀礼であるゆえ、これは民衆の心性を軍事の面から考察する重要な視点である。また、日本近代史で盛んな地域と軍隊研究に西洋史研究の立場から一石を投じ、地域社会と軍隊の関係という今日的な問題についても日欧比較の視座から歴史的に論じるヒントを提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project was to inquire into the relation between the army and the local society and its change in the 18th and 19th centuries. Identities and mentalities of soldiers in this period were also a subject of our researches. Based on our analysis of the military register of the regiments and reminiscences of ex-soldiers, it is concluded, that more and more soldiers were enlisted from Halle and its surrounding areas in the latter half of the 18th century (a phenomenon different from in the former half of the 18th and similar to in the 19th); that most soldiers in the former half of the 19th were not necessarily influenced by nationalism (different from soldiers after the War of the German Unification 1870/71). We also gathered and analyzed articles of the “Soldatenfreund (Soldiers’Friend)”, a magazine for soldiers and underofficers which was published from 1833 to 1918, and made clear why the magazine was published and became popular.

研究分野：近代ドイツ軍事史

キーワード：軍隊と都市　兵士の日常　兵役義務　近代移行期　ドイツ

１．研究開始当初の背景

西洋史研究では、前近代社会が 18 世紀後半の啓蒙期から徐々に変容をはじめ、古いものと新しいものが混在しながら、19 世紀中葉になってようやく旧時代の痕跡が消え去ったとする見方が台頭している。長年軍隊の社会史に取り組んできた丸畠（近代史）と鈴木（近世史）も、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての革命や改革による時代の断絶よりも、それらを包含した一大過渡期であるこの近代移行期に時代概念としての説得力を認めてきたが、近世史研究と近代史研究の間に立ちはだかる壁はまだ克服されたとは言い難い。そこで、軍隊と社会の関係を研究する上でもこの近代移行期そのものを対象にする必要性を痛感した丸畠と鈴木は、本プロジェクトを推進することにした。

近世までの軍隊の伝統や残滓はそう簡単に消えず、19 世紀後半以降のプロイセン・ドイツ社会における軍隊の高い地位も、決して一朝一夕に形成されたものではない。その変容プロセスは、ときに大きな制度改革のような強力な推進力によるてこ入れを受けながらも、漸次的・重層的に進行していったと思われる。そこで注目したのが、ローカルなレヴェルでの諸関係、そして兵士のメンタリティの領域である。人びとの生活圏に迫り、軍隊と地域社会が日常の中で緊張を孕みながらどう向き合ってきたか、また、兵士は地域社会の中でどのようなメンタリティ・価値観を身につけていたのか、といった諸相とそれらの変化を丹念に辿ることにより、近代移行期の問題ははじめて具体的に解明できるのではないか――これが、本研究の出発点をなす問題意識である。この課題に取り組むにあたって、本プロジェクトではおもにプロイセン軍駐屯都市であったハレに着目した。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえて、本プロジェクトでは大きく三つの目的を設定した。

一つ目は、軍隊と地域社会の交わり方を多角的かつ統一的に検討することである。17 世紀中葉の常備軍創設以来、都市は恒常的な軍隊駐屯の場所として重要性を帯びた。従来の軍隊駐屯都市研究では、18 世紀については駐屯に伴う物心両面での都市の負担や兵士と都市住民の軋轢などに焦点が当てられ、19 世紀については軍隊が都市の経済・インフラ・治安維持に与えた影響などに関心の軸があり、近代移行期をつうじて同じ問題設定で通時的に軍隊と地域の関係を考察する視点に乏しかった。そこで本プロジェクトでは、生活空間での軍隊と地域社会の関係、兵士の出自や社会構造と地域社会との関係などを通時的考察の指標にして、近代移行期における軍隊と地域社会の関係の変化を辿ることとした。

二つ目は、兵士のメンタリティと時代の推移にともなうその変容を明らかにすることである。従来の軍事史研究では、軍隊の 9 割を占めていた一般兵士人に行為主体として焦点が当てられることは希であった。そこで本プロジェクトでは兵士が何者であったか、彼らがどのような自己認識、メンタリティを有していたかを考察の対象にした。軍隊の国民化が進展する 19 世紀に兵士が愛国的心情をもつに至るまでには紆余曲折があり、また、その前史でもある近代以前からの連続的視点も必要との認識から、兵士のメンタリティの時代的推移を考察し、国民形成のあり方に一石を投じることを目指した。

三つ目は、日本近代史の分野における軍隊と地域社会研究と知の交流をはかるためのきっかけを築くことである。近年、日本近代史の分野では、都市史研究の中から軍隊駐屯都市＝軍都の独自の価値が見直されることとなり、軍隊と地域社会の具体的な関係、軍隊をつうじての地域の国民化、兵士の日常生活と地域社会の関係など、さまざまな問題が軍都という生活圏を舞台に実証的に明らかにされている（たとえば、『地域のなかの軍隊』1－9 巻、吉川弘文館、2014／15 年）。そこで本プロジェクトでは、この分野から西洋史研究者と日本史研究者が今後闊達な意見交換を行い比較のための共同研究を実施する突破口を開くことも、目標の一つに据えた。

３．研究の方法

ベルリン州立図書館では、研究分野にかんする基礎的研究文献の収集に当たったほか、軍隊体験をもとに自伝や小説を数多く著した同時代の大衆人気作家 F.W.ハックレンダーの著作を収集した。これは、19 世紀前半の兵士のメンタリティを窺い知るための基礎史料である。

ポツダムの軍事史・社会科学研究センター図書館では、1830 年代から刊行が開始された兵士と下士官向けの雑誌『兵士の友 Soldatenfreund』誌を体系的に収集し、約 40 年分の重要記事を複写してデータ化した。これは、軍隊の国民化過程において期待された兵士像・

軍隊像を考察する基礎史料である。
　ハレ大学図書館ではハレ市史の基本文献を揃えた。また、19 世紀に同市で刊行されていた新聞をひととおり確認し、その一部はオンライン上でも閲覧できることがわかった。これらは、当時の地域社会から見た軍隊や戦争の様子を知るための基本史料である。
　史料収集の中心的な場はハレ市立文書館である。ハレは第二次世界大戦で戦争被害がほとんどなかった数少ない都市であり、軍事にかんしても多くの史料が残されている。18 世紀駐屯軍の兵籍名簿、19 世紀の徴兵関連史料、近代移行期全体にわたる宿営にかんする史料、さらには都市整備・拡大と軍事施設の新設・移設などにかんする史料も収集した。
　他には、ともにザクセン＝アンハルト州立文書館分館であるデッサウ文書館とメルゼブルク文書館を訪問した。前者では 18 世紀プロイセン軍の兵籍名簿とドイツ帝国期の兵事史料、後者では貴重な 19 世紀前半期の兵籍名簿を収集した。
　現地での共同作業の合間と年 2 回の研究集会で、収集史料の整理と互いの研究進捗状況、今後の方針などを話し合った。また、数回にわたる学会・研究会報告（学会報告欄参照）で成果の中間報告を行った。最終年度には日本近代史研究者との交流を実施し、神戸女子大学の松下孝昭氏をゲストに招いて知見を得、意見交換を行った（研究成果欄参照）。

４．研究成果
（1）駐屯軍隊と都市社会の関係
　従来、絶対主義時代の常備軍は、さまざまな出自・由来の兵士からなるならず者集団的イメージでとらえられることが多かった。これに対して、19 世紀初頭のプロイセン軍制改革以降の軍隊は、一般兵役義務に立脚したプロイセン出身者だけからなる国民的軍隊とされ、ここに近世常備軍との本質的相違があると言われてきた。しかし、はたして軍制改革をエポックメーキングとする単純な理解でよいのだろうか。そこで本研究では、18 世紀後半のハレ駐屯軍兵籍名簿を詳細に分析することにより、この時期には同地駐屯軍兵士の多くがハレないしその近郊地域の出身であることがわかってきた。もとより、この時期にはまだプロイセン以外の出身者など、いわゆる「よそ者」の兵士が少なくなかったことは否定できない。しかしながら、地元出身者を中心とする連隊という 19 世紀軍隊の姿の原型がすでに 18 世紀後半に見られたことは、注目に値する。ただし、この時期の軍隊にはまだ国民感情のようなものを認めることはできなかった。
　兵士の宿営についてもきめ細かい考察が必要である。18 世紀の都市駐屯の兵士は一般民衆の家庭でホームステイするのが通例であり、その費用はホームステイ先が賄うなど、住民の負担は大きなものであったとされる。しかしながら、近年では 18 世紀においても兵士と地域住民の関には軋轢もあれば和合もあり、両者の関係は単純でなかったことがすでに実証されている。そして今回の文書館調査では、ナポレオン支配期こそフランス軍駐屯の負担が住民に大きくのしかかったものの、その後は自治体レヴェルでの財政援助など、兵士のホームステイに伴う住民の負担を減らす公的努力が見られることもわかった。また、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては新しい軍用地が確保され、兵舎建設も進んだこともわかっている。こうした都市の拡大とそれに伴う棲み分け空間の確保が都市社会と軍隊の関係にどのような影響を及ぼしたかについては、これからの課題である。
（2）兵士のメンタリティから見た近代移行期
　近代移行期の軍隊を兵士目線から観察した史料は極めて少ない。そんな中で着目したのが、先に述べたハックレンダーの筆による軍隊体験記や「兵隊もの」小説である。作品の性格上フィクションも入り交じるため、他の史料と組み合わせて事実関係の確認を行いながら、近代移行期特有の兵士像を描くとこができた。同様の手法で、18 世紀末にハレ駐屯軍に籍を置いた大学卒の異色の兵士 C.ラウクハルトの自伝も分析・考察し、これらの作業を通じて近代移行期の兵士の姿をおぼろげながらも浮かび上がらせることができた。また、ハックレンダーとラウクハルトの著作からは、軍隊駐屯都市における兵士と住民の関係性をさまざまな角度から検討するヒントも得られた。
（3）雑誌『兵士の友』の記事収集と整理・分析
　1833 年、一般兵士と下士官をターゲットにした軍事雑誌『兵士の友』が創刊された。この雑誌は一般兵役義務が徐々に定着していく時代に、兵士の主体的自己認識形成を促進する目的で刊行され、兵士の心構え、軍隊生活よもやま話、一般向けの戦争や軍隊に関する歴史読み物などから構成され、当時期待された軍人像、兵士像や戦争観などを知る上で貴重な史料である。本プロジェクトでは創刊号から約 40 年分の重要記事と全目次を複写し、

さらに記事を体系的に分類してデータ化した。この作業は安藤香織氏の助けを借りて実施され、延べ 80 時間を要して完成した。今後は本誌の記事の閲読・分析を通じて、19 世紀プロイセン＝ドイツ社会における兵役義務をつうじての軍事的価値の普及と国民形成過程を考察する論文を執筆する予定である。なお、データ化した記事目録は将来公表し、この方面に関心を抱く同学の志の利用に供する予定である。

本誌の創刊者であり主要記事執筆者でもあった L.シュナイダーについても、伝記的記述や自伝などを渉猟することにより調べることができた。職業軍人ではなく、さしたる軍歴もなかったこのような人物が軍隊生活に魅了され、退役後に庶民に軍事的価値を広める上で少なからぬ役割を果たしたことが明らかとなり、先に述べたハックレンダーと並んで、民衆の生活空間に軍事的価値とそれをつうじての国民意識が普及する上で、このような人物が果たした役割が確認できたことは、大きな収穫であった。

（4）日本近代史研究者からの知見獲得と意見交換

2019 年 2 月に、日本近代史の分野では軍隊と地域社会研究の第一人者である神戸女子大学教授松下孝昭氏をゲストスピーカとして招聘し（学会発表欄参照）、日本近代史で近年大きな成果を挙げている軍隊と都市研究の最新動向を中心に話していただいた。これを受ける形で、丸畠はドイツにおける軍隊と都市研究の動向について、日本史研究との異同を意識しながら報告した。その結果、日本の西洋史研究では、とりわけ軍隊をつうじての地域の国民意識形成・発展過程の考察において、日本史研究から学ぶべきことが多いことを再認識した。また、この分野でも西欧と日本の比較研究が十分可能なことも確認できた。

（5）今後の課題

現在、『兵士の友』誌を材料にした論文を丸畠が執筆中であり、さらに 19 世紀の兵籍名簿の分析も進め、鈴木が執筆した 18 世紀の連隊簿を元にした論文とつなげ、兵士の社会構造から見た近代移行期の特質を通時的に明らかにしたい。とくにハレ市立文書館での作業を通じて、都市と地域社会の関係について当初予測しなかったようなテーマを設定することが可能だとわかってきた。そこで本プロジェクトに引き続き、丸畠と鈴木で共同して、おもに軍事扶助事業の近代化という観点から新たなプロジェクトを立ち上げることにした。これは、軍事扶助が君主の恩寵から国家の責務へと転換するのが近代移行期であるとの認識を基盤に、都市という生活空間で軍隊がいかに住民と国家を繋ぐ役割を果たしていくようになるかを究明するものである。新プロジェクトは 2019 年度から 3 年間の予定で採択されたので、軍隊と地域社会の歴史研究にさらなる幅と奥行きを持たせていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①鈴木直志「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（下）―1792 年の歩兵第三連隊の事例―」『中央大学文学部紀要（史学）』第 64 号、105－128 頁、2019 年、査読無

②丸畠宏太「書評　トーマス・キューネ／ベンヤミン・ツィーマン編著、中島浩貴他訳『軍事史とは何か』（原書房）」『西洋史学』第 266 号、87－89 頁、2018 年、査読有

③鈴木直志「ラウクハルトとプロイセン軍」『ヨーロッパ文化史研究』（東北学院大学ヨーロッパ文化研究所）第 19 号、5－27 頁、2018 年、査読無

④鈴木直志「書評　屋敷二郎『フリードリヒ大王―祖国と寛容―』（山川出版社）」『法制史研究』第 67 号、450－455 頁、2018 年、査読無

⑤丸畠宏太「プロイセン軍制改革と軍旗宣誓問題―国民軍隊における兵営の忠誠の対象をめぐって―」『ヨーロッパ文化史研究』（東北学院大学ヨーロッパ文化研究所）第 19 号、29－39 頁、2018 年、査読無

⑥鈴木直志「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（上）―1792 年の歩兵第三連隊の事例―」『中央大学文学部紀要（史学）』第 62 号、135－162 頁、2017 年、査読無

⑦鈴木直志「「広義の軍事史」の射程」『海外事情』（拓殖大学海外事情研究所）第 65 巻 4 号、38－51 頁、2017 年、査読無

⑧丸畠宏太「国民国家黎明期（19 世紀前半）の兵営生活の一断面―プロイセン軍志願兵 F.W.ハックレンダーの回想記から―」『ゲシヒテ』第 9 号、19－33 頁、2016 年、査読無（招待）

〔学会発表〕（計 14 件）

①丸畠宏太「近代ドイツにおける軍隊と都市社会―近年の研究から ―」および「松下孝昭報告

「日本近代史における軍隊と都市社会」へのコメント」科研基盤研究 C「近代移行期の都市空間における兵士と地域社会の関係―プロイセン軍駐屯都ハレを例にー」（代表：丸畠宏太）主催研究集会　2019 年 2 月 23 日、於中央大学
②丸畠宏太「中島浩貴報告「日独軍事思想の比較ークラウゼヴィッツと石原莞爾ー」へのコメント 1」早稲田大学高等研究所特定課題小シンポジウム、2018 年 11 月 24 日、於早稲田大学
③鈴木直志「中島浩貴報告「日独軍事思想の比較ークラウゼヴィッツと石原莞爾ー」へのコメント 2」早稲田大学高等研究所特定課題小シンポジウム、2018 年 11 月 24 日、於早稲田大学
④丸畠宏太「19 世紀ドイツの兵士の世界―規律化と国民化―」近現代史研究会、2017 年 12 月 16 日、於立正大学、招待
⑤丸畠宏太「兵士から見る 19 世紀プロイセン軍―兵士 F.W.ハックレンダーの回想記を中心に―」日本クラウゼヴィッツ学会、2018 年 2 月 21 日、於学士会館、招待
⑥丸畠宏太「トーマス・キューネ／ベンヤミン・ツィーマン編著、中島浩貴他訳『軍事史とは何か』（原書房）合評会、評者 1」ドイツ現代史研究会、2017 年 12 月 24 日、コンソーシアム京都
⑦鈴木直志「トーマス・キューネ／ベンヤミン・ツィーマン編著、中島浩貴他訳『軍事史とは何か』（原書房）合評会、評者 2」ドイツ現代史研究会、2017 年 12 月 24 日、於コンソーシアム京都
⑧丸畠宏太「尾崎修治報告「第一次世界大戦期ドイツのカトリック従軍司祭」へのコメント」現代史研究会、2017 年 7 月 15 日、於成城大学、招待
⑨鈴木直志「18 世紀後半におけるプロイセン軍将校の改革論議」比較国制史研究会、2017 年 7 月 2 日、於北海道大学
⑩鈴木直志「ドイツにおける軍旗宣誓」日本西洋史学会第 67 回大会小シンポジウム「忠誠のゆくえ―近代移行期における軍事的エトスの比較史―」2017 年 5 月 21 日、於一橋大学
⑪丸畠宏太「小シンポジウム「忠誠のゆくえ―近代移行期における軍事的エトスの比較史―」（報告者：谷口眞子、吉澤誠一郎、鈴木直志）へのコメント」2017 年 5 月 21 日、於一橋大学
⑫丸畠宏太「近代移行期プロイセンの軍隊と社会―兵士の視点から―」近代社会史研究会、2016 年 12 月 10 日、於京都大学、招待
⑬丸畠宏太「兵士の日常生活から見る 19 世紀プロイセン軍―兵士 F.W.ハックレンダーの回想記を中心に―」ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会、2016 年 12 月 3 日、於東北学院大学、招待
⑭鈴木直志「プロイセン旧歩兵第三連隊とその兵士たち」ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会、2016 年 12 月 3 日、於東北学院大学、招待

〔図書〕（計 0 件）

６．研究組織
(1)研究代表者
丸畠　宏太（MARUHATA, Hiroto）
敬和学園大学・人文学部・教授
研究者番号：20202335

(2)研究分担者
鈴木　直志（SUZUKI, Tadashi）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：90301613

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。